

院外茶話

vol.150 平成 29 年 11 月 1 日

院外茶話も 150 号
毎月の発刊がむずかしく
ここらで一旦中締めを
したいと思います

中締め



青春の夢うち交わし。

高校の同期会に出席すると、みな定年を迎えているが悠々自適の暮らしはほんの一握り。大概は何かの仕事に携わって、好きで働いている者もいれば、必要に迫られている者もいる。

ただ、誰も出世や成功なんて考えていない。今日を生きているのが同期の世代。

この仲間達と 50 年も前に歌った校歌がこれ。

「青春の夢うち交わし」

「一足一足足もと固め」

こんな時代があったかと思う。「青春の夢」なんて気恥ずかしくて口にもできない、夢のまた夢。今さら足元なんか固めても、もう遅い。それは校歌に限ったことではなくて、高齢者は世の教訓からも、例外の扱いを受ける。

失敗は成功の母

七転び八起き

雨だれ石を穿つ

努力は必ず報われる（これは王監督の言葉）

果報は寝て待て

どれも長い人生を前提とした教訓だけど、

我々には、もはや失敗をしている暇などない。七回転んだらもう起き上がれないだろうし、雨だれ石を穿つ間には、逝ってしまう。

それでも同期の中には、まだまだ元気でマラソンを始めたものもいれば、嫌に弱音を吐く人もいて、その気持ちの違いはどこに出るか。



友人はホノルルマラソンを完走した。

1 週間に 10 日こいと思っている間は、楽しく生きられる。でも 24 時間が長すぎると感じたら、そろそろ考えなければならない。特に毎日が日曜日になって、世間の時間の枠が外れると、うまい具合に時を過ごせない。

友人と酒を飲んで冗談をいいながら、交わした言葉はこんなこと。

「それでも死ぬまで、生きていかなければならないから。」

死ぬことには二通りの意味があって、一つは肉体活動の停止。もう一つは精神の死で認知症、あるいはそれに近い状態と言った方がわかりやすい。極端な無気力もここに入る。

「死ぬまで生きる」とは体力、気力ともに勢いがなくなってから、本当に死ぬまでの間をどうやって過ごすかということ。

サプリメントを飲んで、ジムに通ってアンチエイジングに努めれば、少しは元気になって寿命も延びる。でも、こうして延びた寿命は生涯の終わりに近づいてから、その先に継ぎ足されるだけのもの。

こうして命の終わりは先延ばしにしても、そ

れは必ずやってくる。そこで終末期の資料を見ると、何故か度々登場するのが能の世阿弥。

700 年も昔の能が終末期の話題に登場するのはなぜか。それは多分、老いて世間から退くときに、自らの花道を演出することにある。



艶消しの美しさ。世阿弥のテーマは老い。

医師の石飛幸三先生は、世阿弥の「入舞」を引用する。それは「舞台の退き際にもう一度力を込めて舞う」ことで、舞い方は人それぞれ。

末期癌にかかった一人の女性が、抗がん剤の治療を断って、残された余命をこれから癌にかかる人のために費やす決心をする。

癌は急に亡くなる病気と違って、自分の立ち位置を見つめながら過ごしていける。まんざら悪い死に方でもないということ、身をもって示した。これが人生の退き際に見せた入舞。

世阿弥の老女物といわれる「卒塔婆小町」、「関寺小町」には年老いた小野小町が登場する。小町は若く美しかった時の狂いから醒めて、後世の成仏を願うことが本来の道であることを悟る。

「この萎れたると申す事、花よりもなお上のことにも申しつべし」

若い頃の輝きよりも、つや消しの美しさ歌ったもので、生けるもの全てに訪れる「老い」が世阿弥のテーマになった。

一方、行政の資料はアンチエイジングと対比してスマートエイジングという発想を示す。加齢現象に逆らうことなく、知的に成熟する余生を提案するもので、ここでは世阿弥の「風姿花伝」を引用する。

若い時期には誰もが輝いて「時分の花」をもつが、芸を磨いた末に、老いて手に入れるのが「まことの花」というもの。

人は年をとる。無為に年をとり続けたら自分では何もできない身体になって、判断力もなくなれば、終末期には胃瘦も中心栄養も人任せの余生になる。

人生、どんな最後を迎えたいかと言えば、7

割の人がある日突然逝きたいと答える。病院で無機質な電子音を聞きながら、意識が遠のくのではなく、小春日和の縁側で眠るようにころりと逝きたい。

しかし、現実には8割の人が病院で死を迎える。自宅で介護を受けていても、多くの場合はいいよとなる、病院に入って点滴を受けて、またしばらくの延命。

医療は若い人が相手ならば、かなり実力を発揮する。でも、本来亡くなっていくべき人に対する点滴や栄養剤は、苦しい命を長らえるだけかもしれない。

こんな将来を迎えないよう、花道というほどではなくても、一旦、自分の人生を見直して、はじめをつけておいてはどうか。

「入舞」も「まことの花」も、精神の死を迎える前に行う人生の中締め。ここはひとつ自分の人生に中締めをして、あとは生きられるだけ、生きる。こんな選択はいかががでしょうか。

「院外茶話」中締め

院外茶話もついに150巻を迎えることになりました。これまで毎月、欠かさずに続けてきた院外茶話ですが、ここで一旦中締めをしたいと思います。

しかし、家の建て替えが終われば、「一生一度の建築日記」の最終版も書いてみたい。感動をすることや、面白い発見に出会った時には、これも記してみたい。

2か月に1回になるか、季刊にあるか、あるいは不定期の発刊になるかわかりませんが、毎月断念しても、できるだけ続けていきたいと思えます。どうぞ、今後もお見捨てのなきよう。

50巻ずつをまとめた冊子、「院外茶話 第三巻」もなるべく早く発刊をしたいと思います。

